

推理小説

幻書辞典

紀田順一郎



三一書房

推理小説

辞典 辞典

紀田順一郎

三一書房



推理小説 幻書辞典

Printed in Japan

1982年 8 月 15 日 第 1 版第 1 刷発行

1982年 9 月 30 日 第 1 版第 3 刷発行

著 者 紀 田 順 一 郎

©1982年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 株 式 会 社 厚 徳 社

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

幻書辞典——目次

第一エピソード	殺意の収集	5
第二エピソード	書 鬼	125
後 記		237

装帧・滝沢さゆり

推理小說
幻書辭典

第一エピソード 殺意の収集

1

四階でエレベーターを降りると、左手に狭い階段がある。それを七、八段登ると、正面の茶色の扉に、「八月十四日（月）から十八日（金）まで休ませて頂きます。『書肆・蔵書一代』主人敬白」という貼札がしてある。

須藤康平は、その紙を剥がして丸めると、合鍵で扉をあけた。六日間にわたって蓄積された古本特有の黴臭さが、不快な生ま温かさとともに彼の鼻孔を襲った。顔をしかめて息をこらえると、彼は書棚の間を駆け抜け、正面の窓を力いっぱい押しあけて、深々と外気を吸い込んだ。

午前十時。窓の下の靖国通りは、すでに車の往来がはげしくなりはじめている。真向かいのビニ本専門店も、いまシャッターを開けたところである。近ごろ少し下火になったという噂だが、神田神保町界隈のビニ本屋は、十数軒をくだらないであろう。

「十対一かな」

須藤はつぶやいた。十というのは向かいのビニ本屋に行く客である。一というのは彼の店に来る客である。いや、とてもそんなものでは、きかないかもしれない。

眉をしかめながら汗をぬぐうと、彼はカウンターの下から雑巾をとり出し、カリカリにこわばっているのをみほぐすと、ガラス窓の外側についた埃を、から拭きしはじめた。

「あら、わたしがしてあげるのに」

若い女の声でした。ふり返るとこのビルの大家の一人娘で女子大生の小高根俚奈が入口のところに立っていた。ユップの一輪挿しを手にしている。

「やあ、おはよう」と須藤は言いかけて、二の句がつけなくなってしまった。ふだんから少し黒ずぎると思っている顔や肩が、いっそう陽焼けして、切れ長の眼までが少し充血しているほどだったからである。

「そのピンクは何だね」

須藤は「焼けたねえ」という陳腐な質問のかわりに、初めて見る彼女の口紅の色を問題にしようとした。ところが彼女は、

「海へ行ったの。これ夾竹桃よ」

と、彼の訊ねたいことに先廻りし、そのうえ一輪挿しのほうに質問を逸らしてしまった。

「俺、夾竹桃は苦手なんだけどなあ」

ふだんは花などに無関心な須藤だが、これだけは思わず口をついて出てしまった。



「あら、どうして？」

俚奈は彼の脇をすり抜け、乱暴なウエイ
トレスがするように、コップをカウンターの
の上にガツンと置くと、不満そうに睨みつ
けた。

「いや、その花はとにかく暑苦しいんだよ。
うちのほうには、いやというほど咲いてる
んだ」

須藤はレジスターの前に腰をおろしながら、一瞬、花に手をふれようとしたが、すぐに眼を逸らした。

「でも、よく見るときれいわ。ひまわりな
んかより、ずっといい」

「ははは、ひまわりか。こいつはいい」
妙な比較の対象だが、両者ともたしかに
夏の花にはちがいない。

「へんなの！」

俚奈はプツとふくれた。須藤は説明の必

要があると思つた。

「夾竹桃という花は、俺もきらいじゃなかった。名前を聞いただけで、子どものころにあつた佐藤紅緑の『夾竹桃の花咲けば』を思い出すんだ。少女小説だから読まなかつたけど、いいタイトルだよね」

「それなら、いいじゃない？」

「本の題名だけならね。ところがあるときルポルタージュの中で、原爆に被災した人の肌がパツクリ裂けて、ピンク色の肉がのぞいていたという話を読んだ。その著者は『夾竹桃の色に似ていた』と書いている。いらい夾竹桃を見ると、そのことばかり思い出してね。どうしようもないんだ」
俚奈は一拍間合いを置くと、

「意外とデリケートなのね」

と怒つたように言い、コップをとりあげると、さつさと出口へ向かつた。須藤はあわてて声をかけた。

「今日、店番してくれるね」

「さあ、ギヤラアツプしてくればね」

彼女は「キヤハハ」というような、奇天烈な笑いをのこして、さつと扉の外に消えた。オーデコロンの香りだけがかすかに残つた。

「……花々は葉な花々は花々葉、か」

須藤はむかし覚えた回文を口にする、かつたるそりに窓を閉ざした。冷房が利きはじめていた。

エレベーターの開く音が続いて靴音が聞えたとき、須藤は一瞬、「また『風と共に去りぬ』が来やがったのかな」と思った。

毎週一定の日に、古本屋が開店すると同時に飛びこんで来て、店内をあわただしく一巡するや、たちまち風の如く去ってしまう客が数人いる。これは、業者が前日か前々日に開かれる市から仕入れた品を、他人にさきがけて、早いとこ掻っさらおうという魂胆の持ち主と見られているが、仕入れ本の整理はそうパンクチュアルではないので、効率はよくない。古書界の機構の上っつらを知るだけの、初級マニアではないかと見られている。

その一人は、どういう理由からか、木曜日にだけ現われるので、神田界限では「木曜の男」と渾名をつけられていた。

「しかし、今日は金曜日だ」

と須藤が気がついたとたん、扉が開いて、

「や、どうも」

白い背広を着た男が入ってきた。

「おや、津村さん、きょうはお早いですね」

須藤はちよつと意外そうに挨拶すると、

「さ、どうぞ」

と、窓ぎわにある半分こわれかけたイノベーターの椅子をすすめた。

「暑いですねえ」

津村恵三はハンケチで顔をぬぐいながら、そこから視野に入る範囲の書棚をサツと見まわした。

収書家特有の仕草である。

「上衣をとったらいかがです？」

「いやいや、サラリーマンは慣れてますからね。脱がないのがコツなんですよ」

津村は早口で言うと、レジの傍らに五、六冊積みあげられた本を、じつと覗きこんだ。キビキビしているというのではないが、要領がよく、言動にムダがないという感じである。須藤は即売展などで顔を合わせたおり、よく喫茶店に誘われて収書の自慢話を聞かされることがあるが、いつも整然とした話し方に感心させられていた。本好きというものは、本の話をしはじめると際限がなくなるものだが、津村の場合は一つの主題、一冊の本の的をしぼり、

「それでは」

と、切りあげる。三十分ぐらいしか、かからないのだった。話が脱線しても、学生時代の思い出ぐらいのものだった。

須藤も、間のびした粘液質の人間は嫌いだったから、津村には好感をもっていた。しかし彼の職業や住所については、本人の口から聞いたことはない。ただ、同業者から耳にしたところでは、世

田谷のマンションに住んでいて、子どもはなく、広告関係の中小企業に勤務しているということだった。ちなみに、行動的な収書家は広告会社のヒラか中堅サラリーマンが多いといわれる。ある物好きが、デパートの古書即売展に早朝から行列している収書家を調べたところ、先頭の二十人のうち、十人近くまでが広告会社勤務であった。比較的時間に融通のきく職業のためといわれる。

「今日は会社のほう、休みですか？」

須藤は探りを入れてみた。

「ええ、一週間休暇をもらいました。今日で三日目ですがね。じつは昨日もこちらへお伺いしたんですよ」

「それは申しわけない。何かお急ぎのご用でも？」

「いや、急ぎというほどでもないんだが」

津村は言い激んで、向かいの書棚に視線を泳がせた。ちょうどそのとき、扉が開いて俣奈が片手に盆を支えながら入ってきた。コップに、麦茶の入った魔法びんが乗っている。この麦茶代は、須藤が一カ月分まとめて大家に払ってある。

「よお！」津村は大仰に顔をのけぞらせながら言った。「クロンボになったねえ！」

「クロンボは差別用語よ」

「クロンボ印インキ消しというのがあるからね」

「わたしはインキ消しっていうの、使いません。リキッド・ペーパーと申しますのよ」

「文具には興味ないんでね」

俣奈はそれには答えず、麦茶を入れると津村の前に置いた。

「どうも」

津村は俣奈の顔というより、ピンクの口紅から眼を離さずに言った。

「ボーイフレンドと海へ行ったのかね」

「さあ、プライバシーでございますから。本屋にいらしたら、本の顔だけ見てもらいたらいかが」

「おいおい」須藤は慌てて遮った。「お客さんに対しては、親しき仲にも、ということをお忘れちゃいけない」

津村は月に二回ぐらいのペースで来店する。馴染みではあるが、週に二、三回も立ち寄ってくれるような常連とは、やや隔りがあった。

「ごめんなさい」

俣奈は語尾を上げて、相手を小馬鹿にしたようなニュアンスを含めると、カウンターわきの小椅子にドスンと腰をおろした。上背があるので、須藤よりも大きく見える。粗いチェック模様の、ムームーに似た服を着ているのだが、センスが欠けている。美人ではないが、かなり男好きのする顔立ちのうえ、ボーイッシュな体型にも独特の魅力があったから、新宿などをぶらついていると、声をかけてくる男もないではない。

もつとも、これは俣奈自身がいふことだから、須藤も「そんなものか」と思う程度であった。ただ、幼くして病死した娘が、いま生きていたらこんな年ごろで、さぞ心配だろうなと思うことがある――。

「さて、本日のスケジュールは？」

俣奈は事務的に言った。須藤が答えようとするよりも早く、津村が、

「午前中、よろしく」

と、言い、須藤のほうに向き直った。

「じつはね、ちよっとお見せしたいものがあるんですがね。それにはちよっとご足労ねがわなければならぬんです」

「ほう、いったい何ですか？」

「これですよ」

津村は内ポケットから手帳をとり出すと、そこに挿んであった一枚の写真を、勿体ぶって須藤に渡した。

「エッチングかな」

それはかなりキメこまかなタッチで描いた体格のよい裸婦像であった。両膝をついて正面を向き、ちよっと浮き腰になったポーズで、左手に持った布の端がわずかに局部を覆っている。古めかしい絵で、エロチシズムは感じられなかった。

「ロシア人の絵ですか？」須藤は訊ねた。

「え？ どうしてですか？ れっきとした日本人ですよ。エッチング界の第一人者中村典彦の最も油ののりきったころの作です。本が出たのが昭和八年の秋ですから、その年の春か夏の制作でしょう」

「本？」

「そうなんですよ、まさにその本が問題なんです」

と、津村は思わせぶりの笑みを浮かべながら、じっと須藤の眼を覗きこんだ。

「ふーん。これは口絵なんですか」

「そうなんですよ。正確にいうと、限定私家版の貼りこみ口絵です。——しかし、いったい何の本だと思えます？」

須藤は苛々してきたので、突慳食に言った。

「さあ、この手のものは沢山ありますからね」

「沢山はありませんよ。とくに中村典彦のエッチングともなるとね。——そら、高田書房版の……」
「わかった、『ワットオの薄暮』^{たそがれ}でしょう？」

須藤は冗談を言ったつもりで、相手の眼を見たが、思わず唾を呑みこんでしまった。津村は笑っていない。のみならず、左右に離れすぎている両の眼に、きびしさが表われていた。この眼の光には見覚えがあった。いつだったか、即売展の帰りにお茶を飲み、話が収集哲学におよんだとき、「私は本探しの極意は熱意ではない、殺意だと思えます」

と言いつつ、じっと須藤の顔を覗き込んだ、あのときの眼光とまったく同じものであった。

「……ま、お茶が温まってしましますよ」

冷房が利きはじめたのに、須藤は汗をぬぐった。津村は形ばかりコップに口をつけると、無表情にかえって、視線を書棚のあちこちに動かした。両者、腹のさぐり合いとなった。